第87回 会社訪問

株式会社グロービック

会社プロフィール
代 表 者：代表取締役社長　大森 徹
所 在 地：〒332-0011　埼玉県川口市元郷5-6-9
T E L：048-224-4848
F A X：048-224-4858
設　　立：1992年4月
資 本 金：1000万円
従 業 員：50名
営 業 所：関西営業所、神奈川サービスセンター、川口倉庫
事業内容：研究所・工場の移転業務、移転コンサルティング業務など
U R L：http://www.growbic.co.jp

株式会社グロービック　代表取締役社長　大森　徹 氏へのインタビュー

聞き手：柴田眞利（広報副委員長）　岡田 康弘（事務局長）
（取材・撮影・編集協力：クリエイティブ・レイ㈱）

“研究所・工場の移転業務”を中心に 国内外で企業・研究機関の厚い信頼を築く

── まずは御社の主な事業内容をご説明いただけますでしょうか。

当社の主な業務としては、「ラボパック」と呼んでいる「研究所や工場の移転業務」や「移転コンサルティング業務」「バリデーションサポート業務」「機材の販売・保守点検業務」などがあります。

「ラボパック」とは、お客さまの代わりにエンジニアが研究所や工場の移転業務を行うことで、迅速、安全、低コストで移転を行えるよう考案されたシステムです。具体的に言いますと、移転計画の立案、機器の移転前後の点検、運搬業務の立ち会いや指示など、当社のこれまでの経験と実績を活かしたコンサルティング業務を提供しています。

「バリデーションサポート業務」では、治験医薬GMP体制を目指しているお客さまや、製造工程でお困りのお客さまに向けたコンサルティング業務を行うとともに、クリーンルーム、クリーン機器の施設バリデーション業務、クリーンルーム等の清掃や殺菌防虫対策などをサポートしています。

「機材の販売・保守点検業務」では、理化学機器や研究器材の販売とともに、すでに使用している器材の一括点検、修理などの保守点検業務を行っています。特に、オリックス・レンテック株式会社の機器に関しては、機器の検査、校正などの業務委託を行っています。

現場作業風景

本社

川口倉庫

関西営業所

神奈川サービスセンター

――「主な移転実績」という御社の取引先を拝見すると、大手民間企業、大学、官公庁の名が並び、さらには、海外での仕事も手掛けておられるようですね。

当社には「海外S/V・JICAコンサルティング業務」という分野もあり、日本が海外で行う技術協力や無償資金協力において、現地に出向き、科学機器や機材の据え付け、試運転、調整、環境整備、トレーニングなどの技術提供を実施してきました。また、JICAの要請により、専門家を派遣し、現地調査、機器のメンテナンス、およびメンテナンスの指導なども行ってきました。こうして、これまで40カ国以上にわたり理化学機器を届けてきました。

――御社の創業は1992年とのことですが、創業の経緯や創業の頃の様子などを簡単にお聞かせいただけますか。

私は栃木県の野木町の生まれで、1982年に科学機器メーカーに就職しました。入社して2年間は国内でのサービスを担当したのですが、3年目からは海外業務に移りました。当時はJICA（国際協力機構）やODA（政府開発援助）の仕事が多くあり、一度海外へ出かけると、2～3カ月は日本に戻らないという生活を送っていました。

1984年のイランに始まり、パキスタン、ネパール、北京、スリランカ、サウジアラビア、タイ、フィリッピン、ザンビア、ブルネイ、シリア、アラブ共和国、インドなど、当時の開発途上国の病院、大学、理科学・林業・食品研などの建設に携わって来ました。そのような海外と日本の行き来が10年程続きました。

その後、1992年に独立し、現在の会社を創業しました。独立当初は、それまでお世話になっていた会社から依頼を受けて事業をしていましたが、2～3年目から他のメーカーとのお付き合いへと変わっていきました。以来、さまざまな方に助けられて、今日に至っています。

――さまざまな方に助けられたと言われましたが、どのようにしてお仕事が広がっていったのでしょうか。

仕事の依頼に関して言うと、官公庁の入札以外では、紹介やリピートオーダーが多いというのも当社の特徴です。紹介は主に理化学機器の会社や運送会社からいただいていますが、会社同士でこのようなつながりがあったのかと思うようなこともありました。ある大手製薬会社から移転の依頼があったとき、どうして当社を選ばれたのか尋ねたところ、以前に移転業務を行った別の製薬会社から「グロービックは良い仕事をする」と聞いたそうで、意外なところに製薬会社同士の付き合いがあるものだと感じました。

また、90年代はバブルもはじけ、研究所や工場を集約したり、現在の土地を売却して移転したりするといった動きがあり、移転業務にとってはタイミングも良かったように思います。

加えて、当社では建築業、電気工事、機械設置の3つの資格を持っており、建物の設備工事もできるという利点があります。その資格が3つ揃っている

ところは、他社ではほとんどないのではないでしょうか。

── 御社の課題や今後の目標などを、お聞かせください。

現在の課題としては、研究所や工場の移転業務をメインとしているため、特に１～３月に仕事が集中してしまうという点が挙げられます。１年を通してコンスタントに仕事をこなすためにも、機材の保守点検業務やバリデーション業務をより充実させ、受注を増やしていきたいと考えています。

また、グリーンベンチや CO_2 インキュベーターには、これまで決まったバリデーションの方法がなく、それらのメーカーと組んでバリデーションの方法を決めていこうという取り組みなども始めています。

── これまでに特に印象に残ったお仕事があれば、お聞かせいただけますでしょうか。

特にこれがということではないのですが、仕事が終わり、お客さまに「ありがとう」と感謝されたとき、仕事をしていて良かったと常に思います。

当社では理化学機器の会社や運送会社から仕事をいただくこともあれば、当社から運送会社へ仕事を依頼することもあります。そうした方々と仕事をするとき、私が大切にしているのは平等主義です。

仕事を依頼するにせよ、仕事をいただくにせよ、どちらかが泣き、どちらかが笑うということにはしたくありません。苦楽をともにするというか、お客さまが泣いているときは、私たちも泣く、お客さまが笑っているときは、私たちも笑い、ウィンウィンの関係で仕事をしていきたいと思っています。

── 御社のホームページや会社案内には、「活かされて生きよ」という言葉が載っていますが、これは大森社長の座右の銘でもあるのでしょうか。

そうですね、これまでのいろいろな経験を通し、私には、人は、周囲の人々に活かされて、生きているのだという確信があります。仕事も周囲の人々に必要とされるから、与えられるのであって、私たちはそれに応えられるよう、最善の努力をしなければならないし、日頃から応えられる自分を作っていかなければならないと思っています。そうしたことから、やってほしいと頼まれたことは、できる限り引き受けようと考えています。

社会貢献の一環として、現在、ボランティアで保護司の仕事なども行っております。保護観察者１人につき、月に２回、面接を行っています。こういった活動は会社の従業員などの理解や協力もあって、できることだと思っています。

── 「活かされて生きよ」という思いを持つようになったきっかけなどがあれば、お聞かせいただけますか。

昔、海外で仕事をしていたとき、死んでいたかもしれないということを何度か経験しました。イラン・イラク戦争中のイランではミサイルが飛んできたり、フィリピンでは革命に巻き込まれたりしました。それでも、今、こうして生きていることは、私の感覚では、活かされていると思えるのです。

── どのようなことがあったのか、具体的にお話しいただけますでしょうか。

イラン・イラク戦争中にイランに行くことになったのは、日本の国策で進められたIJPC（イラン・ジャ

「活生」
活かされて生きよ。
人は生かされている、
必要とされる。
理想に向かう精神で、
人生の終焉を迎えるときの
有り難きこと。
と語る、大森社長。

パン石油化学）というプロジェクトのためでした。79年に起こったイラン革命によって、イランの日本の石油プラントがいったん中断。それを再開するために、プロジェクトが組まれ、私も23歳のとき、当時勤めていた会社の仕事で現地に入りました。

そのとき、我々が仕事をしている場所にミサイルが飛んできて、爆発したのです。幸い命は落としませんでしたが、何かの破片で傷を負って、野戦病院で治療してもらったことがありました。

イランは、戦争中であっても、お祈りの時間はとても静かでした。空襲警報は鳴ったのに、特に何も起こらなかったこともありましたし、そうかと思えば、突然、ミサイルが飛んできて、いつ戦争をやっているのか分からないところがありました。

一方、フィリピンではマルコス政権からアキノ政権に変わる革命に巻き込まれ、マニラの街を逃げ回った経験があります。滞在中、テレビ局の隣にあるホテルに宿泊していたのですが、そのテレビ局が占拠され、ある朝、目を覚ましたら、周りが戦車だらけになっていました。乗っていた車に弾丸が直撃する場面にも遭遇しました、弾丸は車内を貫通していきましたが、もう少し弾が逸れていたら、あやうく体に当たっていたところでした。

── 日本では考えられないようなトラブルも、海外では起こり得るのですね。

スリランカでは、乗る予定だった飛行機が墜落したこともありました。5人で移動していたのですが、たまたま5人目のチケットがとれなかったため、フライトをキャンセルしたことで命拾いをしました。イランの国内線に乗ったとき、離陸した途端、酸素マスクが下りてきたことがありました。何が起こるのかと不安になりましたが、そのまま飛び続け、なんとか目的地に無事着きました。

そのほか、危ない経験ではありませんが、パキスタンのイスラマバードで3カ月ほど仕事をしたあと、帰国するためのチケットがとれないので、1週間ほど、毎日、広場でコーランを聞きながら過ごしたことがありました。1週間して飛行機のチケットはとれたのですが、同行していた日本の商社マンがチケットと一緒にパキスタンからそのままネパールへ行ってくれという内容の日本からのテレックスを持ってきました。

私がネパールへ到着するまでには日本の本社から機材の取扱説明書が届いているということでしたが、税関で止まっていたため、届かず、結局、取扱説明書が手元に届いたのは仕事が終わった後だった、ということもありました。

── 最後に、科学機器協会に対してご意見やご要望がありましたら、お願いいたします。

昨年の入会からまだ日が浅いですが、熱海での新春大懇親会など、会社の経営者として同じ悩みを持つ者同士の交流が持てたことは、たいへん良かったと感じました。お会いしたのは以前からの知り合いの方が多かったのですが、今後はより多くの方々と交流を広めていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

ゴルフやクルーザーで休日を過ごす

趣味はゴルフとクルーザーです。ゴルフは車に乗って1時間ほどで着く、栃木県のゴルフ場などへよく行きます。クルーザーは東京江戸川区の東篠崎に泊めています。ゴルフとクルーザーには風や波の動きを読みながら前へ進んでいく共通点があります。どちらも遮るものがなく自然の中で遊ぶ爽快感があります。